

L18a 「天の岩戸」日食候補について

谷川清隆、相馬 充 (国立天文台)

古事記および日本書紀の「天の岩戸」記事は皆既日食の経験を記したものであると、筆者らは解釈する。過去の研究者の議論および日食候補を紹介する。とくに「天の岩戸」日食が紀元後であることの可能性を吟味する。地球自転遅れに関する筆者らの最近の結果と、『三国遺事』の説話「延鳥郎 細鳥女」に出てくる皆既食から決まる自転遅れを使って、紀元 247 年, 248 年の日食が日本で皆既でないことを示す。このことから、この 2 つの日食は「天の岩戸」日食候補ではあり得ないことが言える。「天の岩戸」が紀元後の事件であるなら、紀元 158 年 7 月 13 日の日食が可能な候補であることを示す。また、紀元 1 年から紀元 300 年までの日食をいくつか候補として吟味する。決着をつけるには、もっと精度のよい理論が必要である。天の岩戸が、紀元前の事件であるなら、別な方法で候補日食を探す必要がある。最後に、天文学者のいない時代やいない地域において日食経験が記憶された事例を参考にして、候補日食探索の指針について議論する。